

森 三樹三郎先生をしのぶ

池 見 澄 隆

森先生との在りし日を語る機会が、やがて自分におとずれようという想念はかねてよりあった。ときに、そのような眼で先生の挙措をみてしまうのを、不謹慎であると自戒したことも一再ならずあった。にもかかわらず、いま、その場をあたえられて筆は遅々として進まない。書くべきことが焦点をむすばないのである。これはひとつには私が先生の死をまだ受容し得ていないためであろう。より大きな理由は、先生の人物・思想のあまりの深さである。ここにはとりあえず所懐をのべるにとどめたい。

明治四十二年にお生れになり、昭和五年に大学へ入学された先生は、ちょうど人格形成期に大正デモクラシーの洗礼をうけられたことになる。このことが思想の核となって終生、作用しつづけたとご自身とめておられた。京都帝国大学では支那哲学史を専攻。やがて大阪大学で中国哲学の教授とし

て活躍され、停年と同時に佛教大学教授となられる。

つとに名著の著れたかい『梁の武帝』や、近日、単行本として上梓される主要論文『六朝士大夫の精神』、学位論文『上古より漢代に至る性命観の展開』などは大阪大学在任中に著わされた。四十八年、停年退官を機に本学に赴任されてからも矢継早やに論著を公表。中国思想史の文脈に、仏教を初めて本格的に包摂させた『中国思想史』上・下二巻をはじめ、永年の蓄積を傾けて啓蒙書も次々と公けにされた。

ただし、先生ご自身の人生探究にもっとも深くかわるのは、老荘と浄土教とを架橋する一連の論考であったと信じる。先生独創の「死の象徴としての阿弥陀仏」とは、先生がひとり人間として模索の果てにたどりついた世界であった。

私が、同じ研究室で先生と親しい交わりをもたせていただくようになったのは五十一年、仏教学科に「仏教文化」専攻

が創設されて以来である。講義や雑用の合い間のほとんども

先生との對話に費したといつても過言でない。日本を専攻する私は、しかし専門領域のちがいを超えていかに多くのものを得たことか。先生の広大な知的沃野の一隅に立ち、私は自分の関心事だけをしゃべった。当今、考えていることをそのつど話題とした。それに対し先生はつねに快く応じてくださり、多くは支持され、ときに反問され、笑顔で疑義を呈されることもあった。私は乾いた砂が水をすい込むように吸収し、脱殻のための一撃を受けるように啓発された。わが三十代なかばから四十代なかばまで、おもえばまことによい時期の、得がたい邂逅であった。惜しむらくは当方の器量の限界である。

先生から出される話題は、より広くよりやわらかな視点の、文化や人間に関するものが多かった。戦前の大阪・京都比較論もそのひとつである。大阪庶民の健康な野卑を揶揄しながらもこよなく愛され、他方、京都の町の文化的洗練を評価しながらもその奥底をみすえるところがうかがえた。談たまたま、人間の短所や失策におよぶときも、当該者を批判し追求するよりも、むしろ状況のしからしむるところとして理解される傾向があった。理性に根ざした温情というべきか。さらには、特定他者の欠陥を、人間普遍の弱さ、愚かさとして把える風がつよかった。これは仏教、なかんづく浄土教の人間理解につながろう。先生のみごとな、含蓄のある座談に、いくらか気の利いた相槌でも打とうものなら、声をあげ、膝

をたたいて喜ばれたりした。

学科の仕事で私が忙しくなつてからは、先生でづからお茶をいれてくださることがあった。老父の手のぬくもりを恐縮しながら感じたものである。また、私の机上のあまりに乱雑な書類の山をみやって、思わず肩を落し嘆息されたことがある。心労をおかけしたことを悔いた。

本年四月中旬、緊急入院されてから八月末までの闘病の間、先生は本学の教壇への復帰を希いつづけておられた。生来、頑健ではなかった老齢の先生を、悪性の肺炎に抗して四ヶ月間たたかわせたものは、じつにこの現場復帰の一念である。それは生への執着ではなく、教師としての使命感にもとづいた確固たる決意であつたと、今にしておもう。

こうして先生は最後まで自らの死を意識されることがなかった。八月二十九日未明、呼吸不全のさなか、こんなに苦しいなら死なな仕しょう様ないな、とつぶやかれたと聞く。このことは、臨終においてさえもゆらぐことのなかった信念の、反語的表明である。

ともあれ、平素の生死観がついに最期まで貫かれたのであつてみれば、先生は庄子および善導のいわゆる「自然」に帰せられたはずである。逍遙して自然に帰す。自然は即ち是れ弥陀国なり——『法事讃』。

樹正院理誉三女慈容居士 行年七十七歳。

(いけみ ちょうりゅう 文学部教授)